

「あるべき姿」を導く集合知

設計図書整合性向上ガイドブック

(公社)日本建築士会連合会：著

思うに、法律がそうであるように、「あるべきこと」は「あってはならないこと」の体験の集積によって表現されるほかない。本書もまた設計図書不整合を扱いながら、施工図、製作図、完成図を含む広義の設計図書と発注者、施工者を含む全プロセスのあるべき姿を提示しようとしている。

不都合、不具合の体験は膨大で経験者の立場もさまざまだから、ゼネコン、組織事務所から多くの建築・設備・構造設計者と工事監理・管理担当者が参画して、分析と執筆を担当している。驚くべきことは、その努力がこの刊行となって結実するまでの期間の短さと、過不足のない事例収集・分析・考察・提言のわかりやすさである。日本建築士会連合会に設計図書検討部会が設置されたのが2018年7月、本書の刊行が2020年6月である。担当された方々の知見と努力に敬意を表したい。

そのわかりやすさは、まず、事例収集・分析の段階から意図された明快な枠組みに由来する。そもそもの出発点に、不整合には「設計図書に描かれてあることの調整」の課題と、「設計図に描かれていないこと」の課題の二つがあるとの認識がある。事例収集段階では、時期と部位が特定され、分析段階では、影響度と発生頻度を考慮した「ダメージレベル」および不整合発生の予見のしにくさを示す「顕在化レベル」(プロならではの秀逸な発想!)が評価される。これらの課題をフィードバックし、問題の発生時期に先立つ適切な解決時期を示し、そこで予防的なデザインレビューを行うようにするというのが基本的な枠組みである。

加えて、本書では事例分析をさらに掘り下げ、設



(公社)日本建築士会連合会, A4判, 260頁
定価 本体3,000円+税
東京都港区芝5-26-20 5F
TEL 03-3456-2061

計プロセス(3章)、生産組織間の調整(4章)、設計変更(5章)、合意品質(6章)の各章でまとまった考察と提言を行っている。そのいずれもが、「設計図書の不整合」を現象レベルで取り上げるだけでは肉薄できない基本的で重い問題を投げ掛けている。

事故や瑕疵は、これまで標準図など有力な企業内部の社内標準に設計を落とし込むことで軽減されてきたことであろう。しかし、本書が

必要と判断したように、発注者を含む全組織、全プロセスを対象にするとすると、それでは間に合わない。ましてや、市場の国際化も要請されている。

本書が意識しているように、BIMはこうした課題に答を用意する糸口になるであろう。干渉チェックなどという限定的な効果について述べているのではない。ワークフロー、分類標準、仕様書作成、レスポンスビリティ・マトリクスなど、共通言語が確立されると同時に、義務と責任およびその遂行のプロセスが明らかにされ、標準化され、共有されるようになるだろうという期待を述べているのである。

以上は、本書の成立をはるかに超えた大きな課題である。しかし、筆者には本書の延長上にひそかに期待していることがある。それは、本書で分析されたような不整合の事例が継続して膨大に収集蓄積され、「あってはならないこと」がAIによって容易に判断できるようになるのではないかと期待である。その結果、BIMと連携して「あるべき姿」を導く詳細設計のシステムや仕様書作成システムが出来上がる、と期待してよいのではないだろうか。(あんどう まさお)